



平林金属 株式会社

創 業 昭和31 (1956) 年10月
代表者 代表取締役社長 平林 実
社員数 376名 (男286名 女90名)
本 社 岡山県岡山市北区下中野347-104

事業内容

鉄・非鉄金属及び使用済み家電・自動車のリサイクル事業

勤務地(採用エリア)

米子市、境港市、岡山県

採用区分

新卒採用 キャリア採用

インターンシップ・キャリア

有 平林金属の魅力を知れるインターンを実施予定。情報はマイナビにて。

採用担当者からあなたへ

モノを作るのではなく“片付ける”立場から社会や環境に貢献できることに、誇りを持って動いています。仕事は一人で進めるのではなく、仲間と協力しながらチームで取り組んでいます。先輩との距離も近く、気軽に相談できる環境なので、はじめての社会人生活でも安心です。専門的な知識やスキルは、入社後にじっくり身につけられるので、文系・理系問わず活躍できます。

人事総務部 人事課 課長
小室 俊之さん

採用に関するお問い合わせ先

086-246-0011

公式サイトはこちら



求人サイトはこちら



マイナビはこちら



ヒラキンで輝く社員たち

企業や家庭の不用品を適切に回収 困りごとを解決し、再資源化へ

大学在学中は学内の環境運営に携わる学生団体のメンバーとして環境活動に注力。環境関連の会社を幅広く探看中、先輩社員の雰囲気惹かれ当社を選んだ。入社後は、家庭の不用品を再資源化する有人型資源集積システム「えこ便事業部」に6年半所属し、岡山市内の拠点で窓口を担当。「1日で10トン以上の入荷もありました。処分に困っている人の多さに驚くと同時に、毎日出せて、いつでもスタッフが対応する当社のシステムに大きな需要があることを実感しました。接客に加え、数値管理や店舗運営も担った。

昨年からは法人営業を担当。顧客先に向いて品物を下見し、処分の可否を判断したうえで、搬出方法や費用を見積もる。依頼は行政機関や教育施設、製造業、建設業など多岐にわたり、扱う品物も幅広い。「対象が個人から企業に変わり、関わる法律なども違ってきますが、処分にまつわる困り事を解決する点では同じ」。経験を重ね、地域から頼られる存在を目指している。



マテリアルリサイクル山陰工場 営業
瀬尾 好さん(29)
2018年入社



大型の金属物をガスで切断 重機の操作も自在に

「やりがいのある仕事を模索する中で、スカウト型就活サービスを通じて当社からアプローチを受けました。他社にはないオファー文章に惹かれたことに加え、「資源を創出するリサイクルには先を読む力が求められる」という社長のメッセージに触れ、ビジネスモデルの面白さを実感しました」。兵庫出身だが、進学を機に住み始めた鳥取の風土が気に入り、入社した後押しとなった。

搬入された品々はまず検収・選別した後、ガスや解体機などさまざまな機械を使ってリサイクルするために加工していく。10メートル以上ある電車のレールやフォークリフト、船など大型で複雑なものも多く、それぞれに合った加工方法や解体する順番を考えながら進めていく。「金属の種類や形によって最適な処理方法は異なるので、知識に加え、安全性や効率を踏まえた判断力が欠かせません」。

入社後はガス溶接、小型移動式クレーン、フォークリフトなどの技能講習を受け、重機の操作資格も取得。仕事の幅を広げながら、現場を引っ張る存在に成長したいと考えている。



マテリアルリサイクル山陰工場 製造
藤田 慎士さん(24)
2024年入社



1 高品質なリサイクル原料の創出には、受け入れから選別、加工、出荷までさまざまな工程があり、チームワークが欠かせない 2 米子市にある都市型ヤードに続き、境港市に新ヤードを建設中 3 1万トン級の船舶が発着できる岸壁を強みに、鳥取から世界へリサイクル原料を発信 4 「今後、総合リサイクルを行うヒラキンの役割は益々高まると感じています」と平林社長

61

LEADING COMPANY

平林金属 株式会社

●リサイクル事業

“もう一つのものづくり”で サーキュラーエコノミーを実現

廃棄されたモノに魂を吹き込み、新たな未来に製品としてつなげていく——。《平林金属株式会社》が担っているのは“もう一つのものづくり”という名のリサイクル事業だ。

独自性と高品質を追求し
高純度な資源を産出

1956年創業。「父は戦争を通じて、鉄不足が争いを生むことを痛感しました。「大切な資源は何度でも繰り返し使わねばならない」と考え、不要鉄の収集を始めたのが出発点です」と平林実社長(64)。

当初は地元鋳造業者向けに鉄を運搬していたが、事業は拡大し大手鉄鋼メーカーとも取引するまでに成長した。15年には家庭から不要になった金属や家電を正しく回収し、再資源化する「えこ便」を開始。ヒラキン初のBtoC事業は好調で、環境・経産両大臣から表彰されている。

平林社長は「町がきれいなのは片付ける人がいるから。その価値を感じられる人に来てほしい」と語る。

「転機は97年の訪独。使用されなくなった製品の最後まで生産者が責任を持つリサイクルシステムを目的の当たりし、日本にもこの流れが来ると直感。自社の事業を見直し、その時を待ち、4年後に訪れたのは家電製品のリサイクルという流れだった。社内から反対の声もあったが、会社の主要事業になると確信し、2001年に家電リサイクル専用の工場「リサイクルファーム御津」を建設。また、社内に技術開発部を設け、新製品が出るたびに廃棄される時期を見据えて高純度なリサイクルを実現できるような研究を進めるとともに、家電大手との共同研究で室外機解体ロボットを開発するなど、最新技術の導入にも意欲を見せる。釘一本から始まった事業は、現在では家電製品や大型プラントにも領域を広げ、高品質なリサイクルで国内外の企業から高い評価を得ている。